

ASIA Indicators

定例経済指標レポート

シンガポール、台湾も高成長を持続(Asia Weekly (5/17~5/21))

~シンガポール政府は今年の成長率見通しを7~9%に据え置く~

発表日:2010年5月24日(月)

第一生命経済研究所 経済調査部

副主任エコノミスト 西濱 徹(03-5221-4522)

○経済指標の振り返り

発表日	指標、イベントなど	結果	コンセンサス	前回
5/17 (月)	(シンガポール) 4月非石油輸出 (前年比)	+29.4%	+25.3%	+25.4%
	(前月比/季調済)	+2.1%	±0.0%	+2.9%
	(フィリピン) 3月海外送金 (前年比)	+5.6%		+7.1%
5/18 (火)	(香港) 4月失業率 (季調済)	4.4%	4.3%	4.4%
5/20 (木)	(シンガポール) 1-3月期実質GDP (前年比)	+15.5%	+13.7%	+4.0%
	(前期比年率/季調済)	+38.6%	+33.4%	▲2.8%
	(台湾) 4月輸出受注 (前年比)	+35.15%	+36.10%	+43.66%
	1-3月期実質GDP (前年比)	+13.27%	+11.00%	+9.06%
	(香港) 4月消費者物価 (前年比)	+2.4%	+2.4%	+2.0%

(注) コンセンサスは Bloomberg 及び REUTERS 調査。灰色で囲んでいる指標は本レポートで解説を行っています。

[シンガポール] ~1-3月期は史上最大の伸びを示すも、先行きの成長は鈍化する見通し~

17日に発表された4月の非石油輸出は、前年同月比+29.4%と前月(同+25.4%)から伸びが拡大、前月比も+2.1%と増加基調が続いている。また、アジア経済の拡大で石油需要も増加しており、総輸出も前年同月比+29.8%と前月(同+28.8%)から伸びが拡大し、前月比も+1.8%と増加している。輸出の好調を受けて内需も盛り上がりを見せており、同月の輸入も前年同月比+32.0%と前月(同+30.8%)から伸びが拡大、前月比も+3.9%と輸出を上回る拡大が続いている。結果、貿易収支は+39.94億SGドルと前月(+47.34億SGドル)から黒字幅は縮小したものの、経常黒字を支える要因となっている。

20日に発表された1-3月期の実質GDP成長率(改定値)は前年同期比+15.5%と前期(同+4.0%)から伸びが拡大、前期比年率ベースでは+38.6%と四半期ごとの統計開始以来最大の伸びを示した。先月初めの速報値では前期比年率+32.1%とされていたが、その後に発表された3月の鉱工業生産が前月比▲1.5%とわずかなマイナスに留まり、四半期ベースでは前期比年率+124.1%の大幅拡大となっていたことから上方修正の可能性が高まっていた。雇用環境の回復で個人消費が盛り上がり、世界経済の回復で輸出も拡大が続いており、内・外需ともに景気を牽引した。産業別では、公共投資の拡大で建設業が引き続き好調であり、観光客の増加で観光産業や小売業が大幅な伸びとなったほか、金融サービスも活況を呈している。一方、足元ではユーロ不安を発端としてアジアの金融市場でも信用収縮の動きが出ており、東南アジアの金融センターである同国にも少なからずの悪影響が懸念される。また、年末にかけてアジア諸国で軽い在庫調整が予想され、同国経済の拡大ペースも鈍化が予想される。なお、政府は1-3月期のGDP統計を踏まえ、2010年の経済成長率見通しを前年比+7.0~9.0%で据え置いている。

図1 シンガポール 輸出入の推移(前年比)

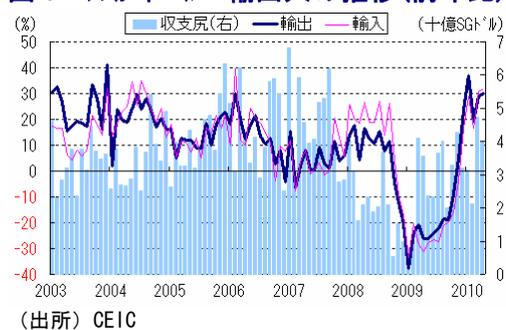


図2 シンガポール 経常収支の推移



図3 シンガポール 実質 GDP 成長率の推移(前年比)

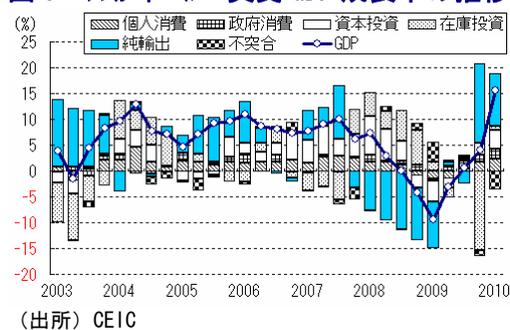


図4 シンガポール 鉱工業生産の推移

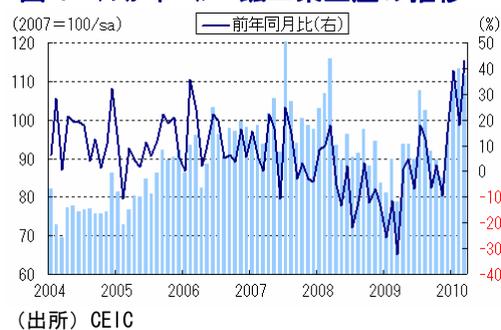


図5 シンガポール 雇用環境の推移



図6 シンガポール 訪問者数の推移



[台湾] ～1-3 月期の GDP 成長率は堅調が続くも、今後は在庫調整圧力の高まりが懸念される～

20日に発表された1-3月期の実質GDP成長率は、前年同期比+13.3%と前期(同+9.1%)から伸びが拡大し、前期比も+2.7%と拡大が続いている。なお、前期に大幅な拡大をみせた個人消費は前期比▲2.5%と減少したが、輸出が中国向けの拡大で前期比+6.5%と前期(同+6.1%)を上回る伸びをみせ、企業の設備投資や公共投資の拡大で資本投資も大幅に拡大するなど、外需の回復が内需を牽引する好循環となっている。足元では生産の急拡大による在庫の積み上がりが懸念され始めているが、主要産業である電子部品関連の在庫率は依然として低水準であり、直ちに在庫調整圧力が高まるとは予想しがたい。しかし、在庫復元が押し上げた昨年来の需要拡大ペースが続くとは考えにくく、年末にかけて軽い在庫調整圧力が掛かり、景気拡大ペースの鈍化が予想される。なお、政府は1-3月期のGDP統計を受けて、2010年の経済成長率の見通しを前年比+6.14%としている。

同日発表された4月の輸出受注は、前年同月比+35.15%と前月(同+43.66%)から伸びが鈍化した。なお、前月比は▲1.2%とわずかな減少に留まり、依然として高水準で推移している。中国本土のみならず日本向けの受注も拡大基調にあることから、先行きも堅調な輸出の推移が期待される。

図7 台湾 実質 GDP 成長率の推移(前年比)

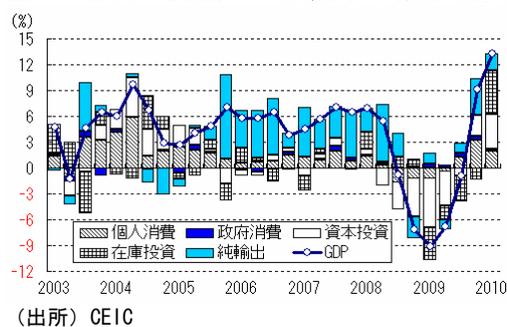


図8 台湾 輸出入の推移(前年比)

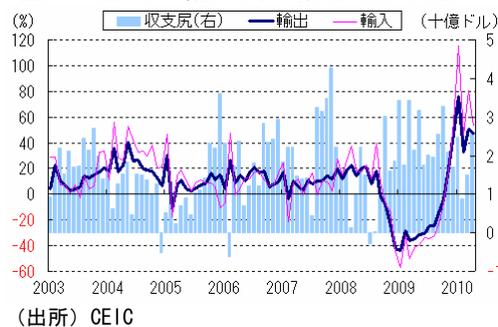


図9 台湾 中国・香港向け輸出額の推移

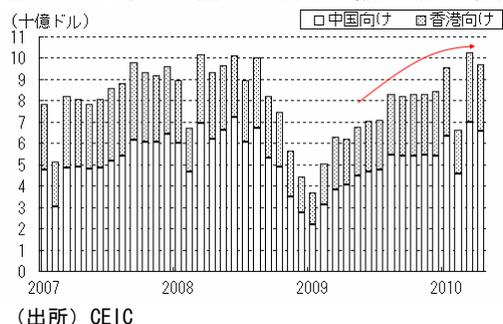


図10 電子部品産業の在庫率の推移



図11 台湾 輸出受注の推移



【香港】 ～中国本土からの資金流入が続いており、徐々にインフレ圧力が高まりつつある～

18日に発表された4月の失業率(季調済)は4.4%と前月と同じであった。4四半期連続で景気拡大が続いているにも拘らず、雇用者数は前年比でわずかに減少するなど、雇用環境の改善には繋がっていない。しかし、景気拡大が続く中国本土からの旅行者によって小売売上高が押し上げられるなど、中国経済の恩恵を受ける形で景気拡大が続くと期待され、雇用環境は緩やかに改善していくと考えられる。

20日に発表された4月の消費者物価は、前年同月比+2.4%と前月(同+2.0%)から伸びが加速し、前月比も+0.4%と上昇が続いている。今冬の異常気象による食料品価格の上昇は一服感が出ているが、国際商品市況の高騰でエネルギー価格に上昇圧力が高まっているほか、景気回復によりサービス価格も上昇するなど、ディマンドプル型のインフレ圧力が高まっている。また、中国人富裕層による不動産取引の拡大などにより昨年春を底に不動産価格が急騰しており、足元では住宅価格、オフィス賃料ともにリーマンショック前の水準を上回るなど、資産バブルの懸念が高まっている。ユーロ問題を発端に国際金融市場は不安定となっており、アジアの金融センターとして海外資金流入が続いてきた状況には変化の兆しもみられるが、中国本土からの資金流入が不動産価格を押し上げる状況は続くと思われ、引き続きインフレ圧力が高まると予想される。

図 12 香港 雇用環境の推移

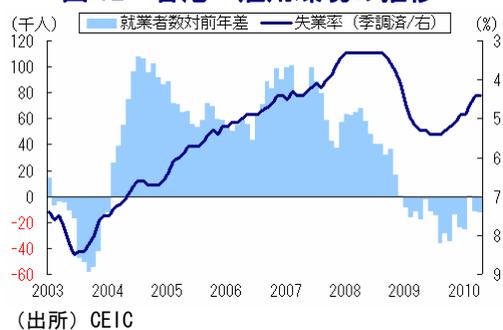


図 13 香港 訪問客数の推移

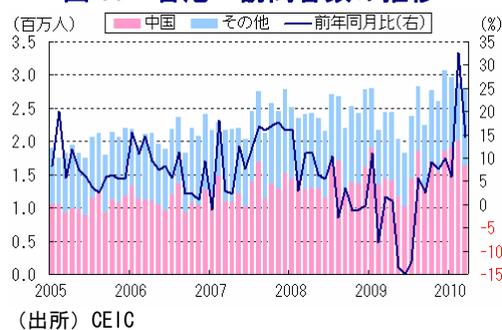


図 14 香港 消費者物価の推移(前年比)

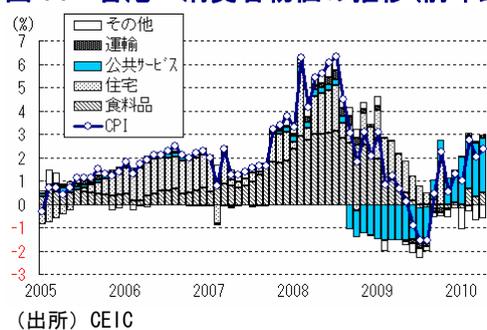
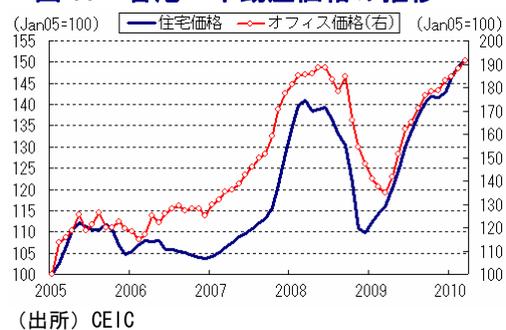


図 15 香港 不動産価格の推移



以上